
嘆きの声

水城翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘆きの声

【Zマーク】

Z5354C

【作者名】

水城翼

【あらすじ】

林間学校に来ていた飛鳥蓮あすかれんに、次々に不幸が訪れる。なぜ、こんなことが起こるのか。それは、ある一つの『理由』があつたからだつた。

プロローグ

何が起こったのか分からなかつた。

いや、分かっていたはずだ。はつきりと分かっていた。

でも、目の前の現実を信じることができなかつた。

信じたくなかった。

まるでスローモーションになつたかのように過ぎていく時間。

…実際は、とても早い時間だつただろうけど。

俺には、長すぎた。

この地獄のような時間は。

目の前には親友だつたはずの人間。

薄笑いを浮かべて、こちらを見据えていた。
みす

俺の瞳には、涙があふれていただろう。

… 酷い。

なんで、どうして、こんなこと…。

目の前の親友だつたはずの人間がなにかを呟いたように見えた。

なんだ？ なにを呟いているんだ？

そう聞く時間は…無かつた。

俺は、崖を真っ逆さまに落ちる。

地面は...見えない。

やうなうまい...、みんな。

... துங்கா...
... துங்கா...

プロローグ（後書き）

こんな下手な文章を読んでくれる人がいるなんて…。
ありがとうございますっ！

よければ、感想をもらえるとありがたいです…。

お願いします。

どんな感想でも、もらえたなら僕は飛び上がるほど喜びます。絶対。

第一話 始まり

不幸とは無縁だと思っていた。

俺のこの学校生活。

親友だつていいし、みんな楽しい奴ばっかだし。

いつだつただうう、この幸せが一転して、不幸のどん底まで突き落とされたのは。

何かが急におかしくなり始めて、歯車が合わなくなる。

やがてギクギクと頭を立て始め、崩れ落ちたんだ。

何が、歯車をかみ合つのを許さないのだうう。何が、俺達をやうさせてしまつたんだうう。

分からぬ…、分からぬ。

* * *

…林間学校一ヶ月前。

「……………く？」

「やつたな、蓮！お前、自己ベスト更新したんだよーーー！」

「…マジ？」

飛鳥蓮。陸上部に所属しているが、自己ベストをさつき更新した…

らじー。

「ホントホント。」それで次の大会はお前で決定だな。」

「…マジ?」

このとき俺は、かなりの驚きに呆然としていたらしい。何回も同じ事を聞いていた。

「だからホントだつて!ほり、お前からも言つてやつてくれよ。工。^{たくみ}」

坂元工^{さかもとたくみ}。俺の一番の親友だ。同じ陸上部に所属しているが、俺よりよっぽど足が速い。…はずなんだけど。

「おめでとう。これでお前は大会に出場できるな。…俺、最近タイム悪いから。あとは頼んだぞ。」

「…H…。おう、任されたつ…!」

工が俺の言葉に少し微笑んだ。

そう、工は最近タイムが悪い。もしかしてこれが、スランプというものなのだろうか。

ということで、今のところ調子が良い俺が選手に選ばれたわけだ。

工と一人で話していたら、ひそひそとした聞き取りにくい声が、少しだけ伝わってきた。

「…やっぱり天才は違うな…。」

「…一人でトップタイムずっと争つて…だろ…?…でも…は、飛鳥が不正してたんだよな…?」

…え?

俺が、不正？

何でそんな噂、流れてるんだよ…？

陸上部の一人のその言葉に呆然としていた、その時。

第一話 始まり（後書き）

変なところで終わらせてしまってすみません。
こんな文章でも、感想をもらえたならありがたいです。
よろしくお願いします。

第一話 かみしめた幸せ

「はいはーい、ストップ。」

啓^{けい}? 何する気だ?

「そーゆーのな、大会に出られないへなちょこが言つ負け惜しみつていうんだぞ。そんな恥ずかしい事言つてる暇あるなら、自己練習してたほうがいいと俺は思うけど。」

啓のそのはつきりとした口調に陸上部の二人はぎくり、とした。

「おー、お前だつて大会に出られないくせに、なに言つてんだよ!」

「俺、別に大会なんて出られなくていいし。ただかつたるいだけだし。それに、君ら俺よりタイム遅いくせに…そんなこと言えると思つてんの? (黒笑)」

けつー? 啓ー? 何言つてんだよ、喧嘩売るな! てゆーか迫力ありすぎて怖すぎだよ。

…とはさすがに口には出せない。

「「お…覚えてるよー!…!」

…世間では「これのことを負け犬の遠吠えって言つんだな…」。

「大丈夫だつた? 蓮。」

「あ…、ありがと。啓。」

こいつはもう一人の俺の親友、空知啓^{そらちけい}。

いつも大会には出ないけど、本当はとても足が速いのを俺は知っている。

いつも優しく中立を保っているけど、少し怒るだけで絶対零度の笑みをしてくるので、怖い。

「ほら。上。気付いてたんなら止めなきゃだめだろ。」「知るか。」

なんかこの二人は仲が悪いみたいだ。顔を合わせるたびに喧嘩している。

特に恐ろしいのが、啓。

いつもの中立の立場はどこへ行つたんだと思わずつっこみたくなるような…。でも、恐ろしいから絶対にそれは口にしないけど、とにかく啓は工の前ではいつでも絶対零度の笑顔を見せるんだ。

「ま、まあまあ。一人とも、そこまでにしどう? な?」「でもなあ、蓮。こいつの顔を見ると思わずぶつ飛ばしたくなる…」「つるせえよ。」「

二人がまた言い争いを始める。

もう止める」ともできなくなつてしまつたので、おとなしく見学することにする。

本当は見学なんてしていたらまずいんだと思つけど、あいにく俺はこの恐ろしい喧嘩を止めるほどの勇気はない。目の前では、言い争いを続ける一人がいる。

でも、俺は思つ。

こんな当たり前の日々が続くのは、どんなにいいことだろ? 幸せは、いきなりなくなつてしまつことを、俺はよく知つていたか

ら。

だから、俺は今の幸せをかみしめる。

もう、一度と幸せを失いたくないから…。

第一話 かみしめた幸せ（後書き）

ここまで読んでくれたかた、どうもありがとうございますーーー
よかつたら感想をいただけると励みになります。

第三話 噛

幸せは無限ではない。

だからその幸せのありがたさが身にしみて分かるのは、その幸せを失つてしまつたとき。

本当に大切なものは、失つてから気付くもの。

俺はそれを知つてゐる。

だから今の幸せを本当に大切にする。

もつ幸せを失いたくないから。

いつかその幸せが、不幸になつてしまつとしても…。

* * *

…林間学校三週間前

「順調?」

俺の幼馴染…朝倉美空あさくらみそらが、帰り際に聞いてくる。

「は? 何が?」

俺は、何のことか分からないので、そう返した。

「練習よ、陸上の…」

「あー、順調順調。あれつきりタイム下がってないし。」

「え? ジヤあ上がったの…?」

「いや、こいつもあのタイムだ。」

「落ちてもいいし、上がつてもいいわけ?」

「ああ。」

「そう、俺のタイムはぜんぜん上がらない。ただ、タイムが下がらないだけが唯一の救いだった。」

「がんばりなよ、本番は上が大会に出た訳なんでしょうへ…」

「う…ん。まあ、そうだけだ。」

俺はあいまいに返す。

思い出してしまった。「俺が、不正をしている。」といつ尊^{そん}語^ごは、気にするなど言っていたけど、俺は気になつて仕方がない。

「あ、そうこうえば。」

美空が、何かを思^{おも}い出^だしたみたいにいった。

「聞いたよ、あの尊^{そん}。」

「さあ、とした。」

まさか美空にまで、あの尊^{そん}が伝わつてゐるとは思つてもいなかつたから。

「あんた、林間の実行委員、立候補したんだってね。」

「へ？？」

俺の口からは間抜けな声しか出でこなかつた。

「え？ 違うの？」

「あ、いや、まあそうだけど……。」

美空の口から出た『噂』は、林間学校の実行委員になつたことについてだつた。ほつとした。もうそんなに噂が流れてしまつてゐるのか、と一瞬だけ恐怖を覚えたから。

「ねえ。」

「な、何だよ。」

「なんでそんなに『噂』つて言葉に反応するわけ？なんかあつた？」

『あくじ』とした。今度はせばれてしまつた、そんな恐怖。

「ねえ、なんで？まさか、嫌な噂流されたりした？」

「あ、い、いや。そんなことは……。」

「あ、田が泳いだ。」

にやり、と美空が笑う。

「図罪へ？」

くすくすと美空が笑う。何もかも、見透かした。そんな笑みだった。

「教えなさいよ」

「…………ハイ。」

ああ……、怖い。

俺は美空に、全部話した……。

第三話 噂（後書き）

どうだったでしょうか。
よかつたら感想をいただけるとありがたいです。
お願いします。

第四話 仕方のないこと

「…くえ。」

「で、でも俺は何もやつていらないんだーー。」

「…ふうん。」

「…なあ、おやんと聞こへる。」

「…うん。」

れつから短い返事しか返つてきてない…。

「だつて俺、工が大会に出てくれればそれでよかつたんだ。なのに、なんで…こんなこと…。」

「蓮。」

うつむいた俺に向かって、美空は俺に呼びかける。

「分かった。蓮は、何もやつてないよ。蓮の言葉、信じるよ。…
もし、その言葉に『嘘』があつたら、私は…「おーこ、おー入れん。」

」

「「啓一。」」

啓が、『おーこ』と笑いながらやつてへる。

「よお、美空、蓮。仲良くやつてゐるか?」
「はー。」

「何で？」

「だつて、一人とも真剣な顔して話してるんだもん。喧嘩したのかな、って思つて。」

話してこねじがこんな内容だけ、首は微笑んだままだ。

「うん、ちょっと、こうこうあって。」

「『尊』のことで。」

「…!? なんで分かるんだよ…!?

「だつて、今の深刻な話題つて言つたり、やつぱり『尊』のことくらいかな~って思つて、な。」

俺は、よつぱり驚いた顔をしていたらしく。皆がそのことを察して説明してくれた。

「だから、気にするなつて言つたのに。」

「……だつて…。」

俺はつこ口もつてしまつた。

「…だつて俺、そんなこと一切やつていらないのに。なにあつもしない『尊』を流されて。気にしないわけないだろ。」

よつやく言葉が見つかって、理由を話した。

「…仕方ないことだよ、蓮。誰だって、恨んだり、妬んだりすることはあるんだから。」

美空の手が俺の肩に触れる。

仕方ないことなのかな……？

これは、仕方のないことなのかな……？

人の心を傷つけるこの行為は、仕方のないことなのかな……？

第四話 仕方のないこと（後書き）

ここまで読んでくれて、ありがとうございます。
感想、評価、誤字など、何でも良いからもられたうれしいです。
お願いします。

第五話 一時の不幸

それは、仲間に裏切られた合図。

それは、仲間が裏切った合図。

それは、希望が失われたときの合図。

それは、自分が嘆く合図。

それは、相手が奇怪な笑い声を上げる合図。

… それは

絶望の、合図。

＊＊＊

「飛鳥君。」

ふいに名前を呼ばれた。

振り返つてみると、そこには宮本… 宮本拓斗みやもと みやもとたくとが立つていた。

宮本は勉強家で、いつも三位以内には入つている。

眼鏡をかけ、いかにもまじめそうな格好をしている。いつは、俺が

苦手とする部類の人間だ。

「先生が呼んでいましたが。」

「あ、悪い。サンキュー。」

「いえ。」

そうこうと、やつやつとこの場を去つてしまつ。

「…………」

「……、あ。そうこうば。」

宮本が立ち止まる。

「なんだ…? 何だよ、お前みたいな『天才』が、俺に何か用かよ…?」

「…、『尊』。聞きましたよ?」

「ぐふ。」

心臓が跳ね上がる。

「へえ…、それはどんな『噂』だよ?」

冷静を装つて聞いてみる。

しかし、俺の手にはすでに汗がにじんでいる。

「…分かりませんか?貴方が、『不正』をしていたといつ噂ですよ。

「…………。」

彼は帰宅部だ。友達もあまりいそうにない。

なのに…。

もひ、そんなにまで『噂』が…!?

「貴方もそういうことをやる人だつたんですね。『天才』と謳わ
れていた、君が。友人を裏切つて。」

どくん…、どくん。

心臓の鼓動が高くなる。

「友人を傷つけて。」

どくん、どくん、どくん…。

どんづん、どんどん高くなつていく心臓の鼓動。

「友人は、貴方のことを信じていたのではないのですか。」

なぜ、こんなにまで富本に追い詰められなくちゃならないんだ！？

「貴方は、そんな友人の心を「やめろよ」

富本の言葉をやめざる、小むけいけど鋭い言葉。

俺の、言葉ではなかつた。

声がしたほづを見ると、やじてむ…。

第五話 一時の不幸（後書き）

誤字などあつまつたら、報告をこただけぬといつれしげです。
よろしくお願いします。

第六話 辛いこと

「工…。」

そこに、工が立っていた。

「俺は、その程度の存在なのか？不正されたくらいで俺はへばらねえよ。…それに、俺の足が遅くなつたのは、…、ほかに、理由がある。だから、蓮のせいじゃない。」

…理由？

…理由つて…、何だよ…？

「…。理由とは、なんですか」

富本が工を見据えながら言つた。

「『帰宅部』のためなんかに教えてたまるかよ」

工は、見下したような瞳で富本を見、そして歩き始める。

「行くぞ、蓮

「つ…、ああ…。」

工は俺の肩を乱暴につかむ。

少し痛みが走つたが、すぐに俺も歩き始める。

「テストの点数」だけで、人を傷つけるよりつなうとするな、富本。」「つーーー！」

テスト……？

……、やうだ。俺、今回はなぜか調子が良くて、五位に入つたんだつけ……。

「そのせいで、私は順位が落ちたんですよ……。飛鳥君。」

『あつひ。

富本が歯軋りする音が聞こえた。

富本の拳は強く握られていて、俺への憎しみがとても強いのが分かってしまう。

「……負けないですから」

富本が口を開くと、そんな言葉が出てきた。

「たとえ、どんな手を使おうと……、私は絶対に、負けないですよ。

飛鳥君」

そして、睨まれる。

本当に、憎しみに満ち溢れた瞳で。

俺は…、誰にも、そんな瞳で見てほしくなかった。

それが、どんなこつらこいつとかよく分かっていたから。

だから、とても…

辛かつた。

第六話 辛いこと（後書き）

感想、誤字などありましたら如何かお願いします。

時々、夢を見る。

あの、恐ろしい光景をはっきりと映し出す。思ひ出させる。
まるで、俺にそれを忘れさせないために、俺を苦しめるために、
俺に、こんな夢を見せていくかのようだった。

その夢を見ると、必ずうなされて目が覚める。

息切れして、体中汗びっしょりの状態で。

いつまで、俺はこんな夢にうなされ続けなくてはならないのだろう。

いつまで、俺を苦しめ続けるのか…。

* * *

「先生、何の用ですかあ」

教室に行ってみたら、先生はしっかりと椅子に腰掛けていて、資料を見ていた。

一番前の席に、皆が座っていた。一いち方に気付くと、にっこりと微笑む。

他にも何人か、よく知っている人が座っている。

…富本の姿もある。

大体予想がついていたけど、やつぱりのメンバーって…。

「うん、呼び出すの遅くなつて」「めんね。林間学校のことなんだけ
ど…。」

やつぱり、林間のことだったか…。

「さ、どうでもいいから座つて。」

伊織彩音先生。
いおりあやね

このクラスの担任だ。
外見も中身も若い。
長い髪を後ろに束ねていて、明るい先生。
生徒からも人気だった。

俺は、啓の隣に座る。

「よつ、啓。」「
「蓮、お前ちょっと遅れたっぽいだ。」「やべつ。」

俺は、少し遅れたらしい。
けつこう話が進んでいた。

「…とこいつとで、キャンプファイヤーはこねでようじこでじょつか。」「

宮本が仕切っていく話に、急いで追いつこうとする。

…といふか、やつぱり宮本と会つてからそんなに経つてないのに…。

この事実は、とても早いスピードで話が進んでいたことを物語つていた。

啓に教えてもらひながら、話についていく努力をした。

「…で、この役は飛鳥君がやるのがいいと私は思つのですが、どうでしょうか。」

へつ！？

急に自分の名前を出されて、心中で素つ頓狂な声を出す。

口に出なくて良かった…。

「な、何の役：？」

おやのむかの聞いてみると、畠本の口からは……、

第七話 夢（後書き）

どんな言葉が出てくるんでしょうね…。
まだ僕にも分かりません。（キッパリ。
感想よろしくお願ひします。）

第八話 言いたいこと

「登山で、君のクラスの先頭を歩いてもらいたいんだ。」

はつーーー？？

俺は、よっぽど間抜けな顔をしていたらしい。

宮本があきれたような顔でため息をついて、話し始める。

「あなたのクラスの担任は女性でしき。なのでこの中で一番体力があると思われるあなたに登山のとき先頭を歩いてもらいたいのです。」

はつーーー？？

俺が！？

「なんで、俺なんだよ。俺より、よっぽど体力がありそうなやつはここにいるのに」といって、

脇を指差しながら、俺は宮本に言ひ。

「あなたは、大会に出場するほどのかたです。そんなあなたが、この役に選ばれないなんて、おかしいでしょう。」

俺が憎いなら、もっと俺を苦しめるような方法があるはずなのに。

なぜ、俺をそんな役にたたせるのか。

なぜこの場で、『尊』のことを言わないのか。

言いたいことはたくさんあった。

「……」

宮本が、冷め切った表情で俺に問いかけてくる。

「ようじへお願ひできますか？」

「……」

なぜかその言葉が俺をせめているようになしか聞こえなかつた。

「……」

だけど、先生もいて、俺の友達もたくさんいるこの環境で、それを口にすることなど、できなかつた。

相変わらず、宮本がその冷め切つた表情で俺を見る。

何か、何か答えなきや…。

「…、あ、ああ…。分かつた…。」

第八話 言いたいこと（後書き）

感想、誤字などありましたら報告をいただけるとありがとうございます。
よろしくお願いします。

第九話 帰り道

幸福の絶頂にいた人間が、不幸のどん底に落とされたとき。

その人間は、いつたい何を思うのだろうか。

その人間が、嘆く声を口にしたとき。

その人間は、いつたい何を思うのだろうか。

…確実に、思うだろう。

「どうして、こんなことに…、なったのだろう…？」

＊＊＊

啓と一人で歩いていくと、校門に工がいた。

「…終わったのか？」

工が啓をにらみつけながら言った。

……やつぱつ」の一人は仲が悪こりしこ。

「ああ。終わつたけど……それが何か？」

路もトに絶対零度の笑顔を見せる。

……ヒツヒツ、仲が悪こりの『三』ですむ仲でなこりだ……。

「まさか、俺のひと待つててくれたのか？」

「…………」

聞こてみると、トは無言のまま歩き始める。

「ト！ ？ 待てよー！」

俺も急いでトに追いつき走る。

路も歩き始めるが、トとこつも一定の距離をとつてゐる。

と、その時。

「あつれえ？ みんなひつて何やつてんの？.」

美空の声がした。

「げつ」

トがすゞしく嫌そつた顔をして、美空を見る。

「ちよつと、タク。なんて顔してんのよーー。」

「…………ちつ、何でてめえが、こんなとこにいるんだよ」

「部活の帰りだよ。なんか三人とも帰り道っぽかったから話しかけてみただけ。」

「ひーりと美空が笑う。

「俺がてめえを嫌がってるの知つて話しかけたな、この野郎……！」

工が、震える拳を押さえながら、言った。

……まあ、その怒りに満ち溢れた口調と表情はぜんぜん抑えられていなかつたけど。

「あ、バレた？」

けろりとした表情で、美空が笑う。

「ひ、てめえ……」

Hの言葉に、美空がくすくすと笑う。

「あー、もあ。楽しゅめる。Hをからかうのはつーーー」

「…………だから苦手なんだ、こつ……」

ちつ。

工の、舌打ちをする音がした。

「で、本題に入るけど。」

その言葉は、美空は工をからかうためだけに来ていたわけではないことが分かった。

「蓮、あのさ……」

ひかえめそつな口調で、美空が語り始める。

「…………え？」

その、美空の言葉は……あまりにも絶望的な言葉だった……。

第九話 帰り道（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。
感想、誤字などありましたら、よろしくお願いします。

第十話 情報

「はあ……」

「ひひっよひ。ひひっよひ。

こんなにも簡単に、相手の罠にかかりていたなんて……

美空の言葉・…本当なのか…?

* * *

富本が…。

蓮の不正の噂を流していたんだって。

蓮を陥れるために…。

それで、蓮を動搖させて、最後には…

* * *

最後の言葉は美空の情報が足りなかつたりじへ、それまでの情報だつたが…。

第一、ひひでひんな話を聞いたんだよ。

気になつた俺は、電話をかけてみることにした。

「おー」は俺の自室だ。

俺はベッドに横たわり、ケータイを取り出した。

「おー、美容。さつきの話、本当なのか？」

「…、あれ。蓮?どうしたのこんな夜遅く。

美空はこんな夜遅く、という表現をしたが、俺にとっては夜遅くではない。

そのことまつこまない。人によつて感じ方はずいぶん違つてくるのだから。

「ほり、あの話。富本が噂を流してたつて話。」

「ああ、あれ?ホントホント。しつかり自分の耳で聞いたんだから。

…聞き間違いがなければの話だけ。

…なんかすこく信じたくなくなつてきた。

「その話、誰に聞いたんだよ。」

「んー?廊下で偶然。だから嘘かもしれないよ~?」

「おーおー。聞き間違いもなにも、その情報は嘘っぽいかもしないつてことかよ…。

「どんな感じで喋つてた?そいつは男?女?学年は?」

ちよ、ちよっと待つて……いつぺんに聞かないでよ。…まあ、どんな感じで喋つてたかね。

ちよっと反省。あわてていろいろ聞きすぎた。

大声でもない。でも、こそこを話してたわけでもないわ。でも、少し聞き取りにくい声だったかな。

やばい話なら、もっと小声で話すものだ。やはりなにかの勘違いか

…?

性別は男だった。三人で話してたわ。学年は私達と同じみたい。

「…ありがと。聞きたい」とは聞いたから、もう俺寝るわ。おやすみ〜。」

あつーちよと待つてみた、蓮。

「…何?」

聞くだけ聞いて、わざと切り替つちようなんて、不公平だよ。私の話も聞いて。

「…。悪かったよ。何？」

たまに女は鋭いことを言ひ。
それはあまりにも納得できてしまい、うんと頷くしかできなくなる。

…、あの…。

第十話 情報（後書き）

変なところで終わらせてしまってみません。

…蓮君は、階段を上つていいようなものです。

最終的には、階段は途切れ、落ちていくわけです。

階段を上つていくにつれ、落ちるときの痛みは強まるのです。

なんのために階段を上つていいたのか。

絶望に染まる、最期。

それが書きたくて、この物語が生まれました。

なんだか某ゲームの詩に似てますね。

…何が書きたかったか分からなくなってきたので、書きました。ハ
イ。

感想、誤字などありましたらお願ひします。

第十一話 嘘

大丈夫?

一瞬、言葉を失った。

どうして、こんなことを聞くのか、分からなかつたからだ。

「な、なんでそんなこと、聞くんだよ。」

結構ショック受けてるだらうと思つて。

「だ、大丈夫だよ。全然。」

嘘。

ぎくり、とした。

本心がばれてしまつて。とても、とても。

大丈夫なんかじゃないと思うよ。今の蓮の状態。

「.....」

辛いなら、力になるから。じゃあね。

電話が切れた。

俺は、切れたケータイを見つめることしか、できなかつた…。

次の日。

「…西本はさ、最終的に蓮をどんな目にあわせるつもりなんだろうね。」

「ああ。…西本がなにを考えているかが、分かんないんだよなあ…。」

「

啓が頭をかく動作をする。

「もしかして、『林間学校』が関係あるんじゃないのか?」

工が、ちらりと俺を見ながら言った。

「富本は、お前に登山のときに先頭を歩かせる役を任せたんだろ? それが何か関係しているんじゃないのか?」

「…そうか?俺は、そなは思わないけど。俺は、もっと他の方法で蓮を陥れていくと思うよ。」

「…りと笑つて啓が言つ。だが、いつもの如く啓の微笑みは絶対零度だつたりする。

「…俺は、俺の考えを述べたまでだ。」

工は、啓を睨みつけて言った。

「…やうか」

啓が言ったその言葉には、なんの感情もこもっていないように聞こえた。

…しかし。俺には、もつひとつ…いう、なにかとも思ひしこ感情がこもつているかのようになにに聞こえてしまう。

こんなこと、すぐ変な感じがするのだが、それでも、俺はそう思ひうる。

この言葉を壇に、俺たちはそれ以上言葉を交わさなかつた。

でも…。

このとき俺は気付かなかつた。工のことを、とても恐ひしこ瞳で見ていた人物のことだ。

第十一話 嘘（後書き）

何か作者に言いたいことがあつたら、感想をお願いします。

「もつと更新を早くしろ」とか。

きっと、その感想をもらつた三日後（遅つ）くらいには次が投稿されてるかと思います。

落ちてこくことは簡単だ。

ただその深く暗い穴に飛び込んでいけばいい。

しかし、上がつてこくのは?

どんなに這い上がつても、落ちてこく。

どんなに上がつても、上がつても……。

最後には、力尽きて落ちてこく。

上がるの……、難しそうだ。

* * *

：林間学校一週間前。

：放課後の部活の途中。ふと、声をかけられる。

急に視界が真っ暗になる。

「蓮 つ。」

「うわっー。」

誰かに手を手でふさがれたらしい。

俺はあわててじたばたする。：間抜けだ。だが、一向にその手は離れない。

「……だーれだつ。」

「……。優^{ゆう}だろ。手を離^{はな}せよ。よ。」

視界が明るくなる。

「あ、怒つた？ごめんごめん。急にこんな事して。」

「……まあ、いつものことだろ。」

「そつか。じゃあこれからも続けるから～。」

「オイー！」

こ^ここ^こは秋津優^{あきつゆう}。同じ陸上部部員だ。

いつもぼーっとしているが、走るときは別だ。とても速い走りを見せてくれる。

こ^ここ^こはいつも、俺を見つけるとこのよくな動作をしてくるのだ。いつものことなのに、引っかかるてしまつ俺もどうかと思つただが

。：

……まあ、一言で言えば面白^{おもしろ}いヤツだ。

「で、何の用だよ。」

「あ、うん。僕、蓮に言いたいことがあつて。」

……こと笑つて優が言つ。

優は背中の方で組んでいた腕をはなして、俺のほうへ向かわせる。そして、あつとこ^こう間に優の手は俺の肩を捕らえる。

第十一話 優（後書き）

かなり微妙なところで終わらせてしまってすみません（汗）
こんな僕ですが、応援していただけると本当にうれしいです！
よろしくお願いします。

がしつ…

ものすごい、強い力。

こんなに細い体から、どうしたらこんなに強い力が出てくるかに疑問を抱いたが、そんなことよりも、すごく痛い。体中に激痛が走り、俺は思わず小さく声を上げる。

「…ケイコク、だよ」

俺の耳元で…、小さく、優がささやく…。
ケイコク…。警告…？

「…っ、警告…？何のことだよ…？」

「それはね」

優が、そつと俺にささやく。

その声色は、とても恐ろしいほどに冷め切っていた。怖い。

どうしてかは分からない。だけど怖い。

そつ…と、優の顔を見てみると…

口元は笑っていた。でも、目は笑っていない…！…！
優がゆっくりと口を開く。

「林間学校に、行っちゃいけない。」

…え？

「...アルカナ...?」

一行つたら…確実に…」

アーリーで優れた語彙を身に付けておこう。

そつしてこらへり、俺の体中が汗がびっしょりになつていく。…。
氣持ひ悪い…。はやく、この場が過ぎ去つてしまえばいいのさ、と

「確実に、後悔すると思う。」

後悔
か

みんなが林間学校に行っている間、ずっと家にいたら、それこそ後悔すると思う。

ギシツ

今までよりも、もつと強い力で肩をつかまる。

「これは警告。聞くか聞かないかは蓮の自由。でもね……。」

ふつ
..

一瞬、優が俺の肩をつかむ力をゆるめた。
痛みから解放され、俺は少しほっとする。

しかし、それは本当に一瞬で、すぐにものすごい痛みがおそってく
る…。

「聞かないと、確実に後悔するから。」

第十二話 警告（後書き）

久しぶりの「嘆きの声」の更新です。
ここまで辛抱強く待つてくださっていた方、ありがとうございます。
これからも、よろしくお願いします。

第十四話 謎

だんだん…呼吸が荒くなつてくる…。

誰か…誰でも、いいから…。

ここはグラウンドで、今は部活中だ…。

誰かが、見てるはずなんだ…。

部活動をしていないことへの注意だつていい。

お願いだから…。

周りを、見回してみる…。

誰か…誰か、居ないのか…？

すると…。

誰かがいる、とかそういう問題じゃない。

実際、そんなに近くに人はいなかつたけど。

俺達を見ている人は、かなりいたのだ。

しかも、その俺達を見ている人は、ほとんどが笑っている。

思わず自分の目を疑つた。

しかし、明らかに笑つている。

…ついに、ストレスで頭がどうかしてしまつたのだろうか…

…そんなことはない。明らかに笑つてゐるのだ。嘲笑つてゐるのだ。

俺達のことを…こいや、『俺の』ことをだ…！

そう思つて、今までにない恐怖がおそれいかつてくる…！

俺の頭がどうかしていないとすれば、俺が『不正』をしたといつ尊
が流れてくるせいか…？

そのことの追い討ちをかけるため、優はこんなことをあつてこると
でも言つのか？

だとしたら、なぜ…『こんな形』で…？

『林間学校』と関係があるひつひつのかッ

しかも、『警官』…ツ…ツ…ツ…ツ…ツ…ツ…ツ…？

まさか、『警官』といつのは、もう『不正』をするな、とこいつ意味
なのか…？

じゃあ、『林間学校』についてのまじめな意味だよッ！って説明がつかないじゃないか……！

……訳が分からぬことばかりと考へていて、急に優の手が俺の肩から離れる。

俺は、痛みから解放される。……やかつた。

「……警告……、聞いてくれると、いいな」

優が、ぽつりと呟つた。

……そのまま、優は歩き出す。

俺は、その優の背中をいつまでも見守つていた。

第十四話 謎（後書き）

なんだか… ようやくホラーになつてきただ気がします。
気のせいですね。

まだホラーなんかじゃないですね。
これからもこの作品にホラーを求めるないほうがいいです。
ホラーって、僕書いたことなかつたんですね。
なので、どういう話が怖いのか分からないですから…。
感想などありましたらお願ひします。

第十五話 家庭の事情

今日は嫌なことだらけだった。

……これから、またその“嫌なこと”があると思つとい、

……帰りたくない。

＊＊＊

「……ただいま」

とつとう、家についてしまつた……。

家に入り、いつものように玄関の靴を確認する。

……靴が……一人分……ッ！？

俺は嫌な予感がして、すぐに階段を駆け上がる……ッ！？

……しかし……

＊＊＊

……林間学校前日。

「蓮。……どうしたんだ、なんか機嫌悪そつな上……、痛々しいんだけ
ど……」

啓が俺のところに来て、俺の頬に貼られたばんそうじのを見て……悲
しそうに……言つた。

「……へ、なんでもないよ。気にするなよ」

まずい。

れつきのは、明らかに作り笑いだつた。

「……元気出せよ」

いつの間にか工もここにいて、俺の頭に手を置いた。
頭にあるたんこぶが見つかったのかと思ったが、工は俺の頭をぐし
やぐしゃと撫で回す。

……強がつていたのが、ばれたんだな……。

「工は心配性だよなあ。蓮なら大丈」「お前もだろ、人の事言えねえ
だろうが」

……久しぶりに見たな……、一人の喧嘩。

相変わらず啓は絶対零度の笑みを炸裂させていはるし、工はきつい言
葉をぶつけている。

……しかし、今はそれも俺を励ましてくれているのだと慰つていて
きて、嬉しくなつてくる。

「……一人とも、ありがとう。」

本当に……ありがとう。

「れーんつーやつ……ほ……」

バシンツーーーと肩を叩かれる。

振り返つてみると、そこには美空がいた。

美空は俺の頬を見て、語尾を小さくしていく。

「おっ、美空。」

なるべく平然を装つて言つた。

だが、美空のその悲しそうな表情は決してなくならない。

しだいに……美空の目から涙が、浮かんでくる。

「み、美空つーーー？」

俺はそれを見て慌てるが、美空は俺に背を向ける。

「うー、ごめん。用事思い出したから行くね。」

そう言つて、美空は走り出してしまつた。

「……美空」

「……あこつも、つらいだらうな

「優しいから、あの子。」

そうだろう。

美空は優しい。

優しいゆえに、俺のこの“家庭の事情”は結構こたえているみたいだった。

第十五話 家庭の事情（後書き）

一気に林間前日まで飛びました、はい。
もう無理です、はい。

ごめんなさい。

林間が書きたくて仕方がありませんです。
こんな僕ですが、最後まで生温かい田で見ていてください…、お願
いします。

第十六話 わせやく声

ビハーハ…。

そんなに、悲しい顔をしているんだ?

俺は…ただ、お前達に笑つていてほしいだけなのに。

それだけなのに。

お前達の笑顔を、見てみたいだけなのに。

幸せな…毎日を過ごしたいだけなのに。

ビハーハ…、こんなことだ。

* * *

林間学校当日。

…ついに、来てしまった。この日が。

考えに考えた末、やはり林間に行くことにした。

やはつ…、家にいるのが、辛い。

だから…。

それに、『警^{サムライ}』の意味も、林間に来れば分かるのだから。

…これが、俺が出した答えだ。

「あーあ、来たりやったよ。どうあるの?..」

「…別に、ほつとせばいいじゃないか。」

「でもやあ、そういう訳にもいかないじゃん?…黙つてみていい問題じゃなによ、これは。」

「いいじゃないか、ほつとておけ。」

「でもやあ…。」

「やんなにこいつにかしたいになら、お前一人で行けよ。俺だつて出来る限りのことはした。」

「ええ、僕う?…やだよ、そつちでなんとかしてよ。」

「嫌だ」

「うそつ。めんどくせこ」とこなつたなあ。」

「それなら、初めからほつとナガニコ話じやないか。」

「……でも、楽しもうじゃん。」

「……ま、それもそう、だな」

「それじゃ、僕はこれからどう話が進むか傍観しにいくね。」

「ああ。」

「じゃあ、……は、どうあるの? 一緒に見に行く?」

「俺はいい。……、一人で見に行つて来い。」

「分かった。……さすがにやばいと思つたら、止めに入つていい?」

「……好きにしろ。」

「うそ。……あ、終わつたら報告するね。楽しみにしてなよ~。」

「ああ、楽しみにしてる。」

* * *

第十六話 わざやく声（後書き）

復活しました！！

…復活したのは…いいんですけど…。
まだまともな文章が打てません。
しばらくまた、更新が止まるかも、です。

第十七話 登山

「えー、これから山を登つまーす。」

伊織先生の声が響く。

「せんせー、もつりょーと教師らしこ面に方してくだせー。」

その一言に、さうと笑いがあふれた。

「アレ、いぬわこどすよー。せー、しゅっぽーつー。」

「せんせー、もつりょーと教師らしこ面に方してくだせー。」

「やつぱつわくわくですよー。れわわこわせしきー。」

このやり取りがとても幸せな毎日を再現してくれる。

「じゃ、飛鳥君。よろしくね。」

「ハイ、任せください。」

「先生は飛鳥君のすぐ後ろでルートの指示するから。安心してね。」

「ハイ。」

登山は順調に過ぎていった。

しかし、それは起こってしまった。

＊＊＊

「うわっ！？」

登山後半。

俺は、うつかり木の根に足を引っ掛けで、転んでしまった。

「痛つ……」

別にそれで足をひねつてしまつた、とか。そういうのではなかつた。“もともとあつた傷”に、みごとに木の根が当たつてしまつたんだ。

「飛鳥君、大丈夫？」

先生が駆け寄つてくる。

幸い、俺が転んで倒れた方向が前だったので、後ろには問題なかつたらしい。

「立てる？」

先生に聞かれて、俺は足に力を入れる。

「あー、無理っぽいっす。山、降りるんで先行つてください。」

ルートも覚えているから大丈夫だらう。

「こちおう空知君についていってもらいましょう。」

「ほら、蓮。ちょっと道をずれよう。みんなは先にいっててください。」

俺たちは道をずれる。

「……大丈夫か？」

「大丈夫だよ、工。それより俺達の代わりに楽しんでくれよな」

「……ああ」

工がちらり、と啓をにらんだ気がした。

にっこりと啓が微笑む。

工が上へ上つて行ったのを見て、俺は啓のほうを改めて見る。

「悪いな、啓。せっかくの登山を邪魔して。」

「いや、いいんだ。」

「……そうか。……お、だいぶ人も少なくなつてきたな、そろそろか？」

上に向かっていく人がまばらになつてくる。

「なあ、蓮。ちょっとといいか？」

「ああ、いいぜ。なんだ？」

「……」

そうこつたと思つと、啓は口をとじた。

啓の口が開くのを待つた。

「…向こうで、話さないか？」

啓が指差した方向は、崖がある方向だった。

「あつちか？」

「そうだ」

「あつちはいっていいのかな、崖だぞ。」

「大丈夫だよ、落ちなきやいいんだよ、落ちなきや。」

「それもそうか」

「じめんな、どうしても、人に聞かれたくなくて。」

確かにここだと、体力がない人があとからぐる可能性がある。
聞かれたくない話なら仕方がない。

「じゃ、いくか」

「肩貸す。一人で歩けないだろ？」

「おう、サンキュー。」

そして俺たちは、人気のない崖のほうへと歩いていった。

第十七話 登山（後書き）

適当に書きました。

この文章を書いている今、とてもない後悔を覚えています。
ということで、後で書き直します。

許してください。

次回は自重しませんよーー！

多分きっともうすぐ公開ですーー！

後悔しないでくださいね。

（8月1日）

第十八話 … ひつじ。

「…で。話つて何だよ？」

俺はなるべくがけのまつこは近づかないよつこしながら啓のまつを振り返つた。

「……そえ」

啓が口を開いた。

開いたはいいが…何と言つているのかよく分からぬ。

「…？いま、なんて言つた？」めん、聞こえなか…「お前さえッ！
！…！」

啓の急な大きな罵声に、俺は思わず肩をすくめた。

「…な…ッ」

「お前さえッ！…！お前さえ、いなればッ！…！俺は、俺
はッ！…！」

啓が罵声を俺に浴びせながら、俺の胸倉をつかみかかつてくる…！

「はははははははは…！…とんだ天然野郎だよ、てめえは…！…！…せつかく優が『警告』を出しているにもかかわらず、俺このじつこじつくるなんてなあ…！…！」

「け…いつ、ど…して」

俺の胸倉をつかんでいた路の手せ、俺の首へと伸びてへる……ッ……。

「がツ……」

ぎり……つ

息が……出来ない。

「警戒心が足りなかつたなあ……なあ、飛鳥蓮ツ……」

「……ビツ……して、だよ……ッ、路……」

首にかかる力がだんだん強くなる。

……苦しい……

もぢりん、首を絞められてこる」とで息が出来なくて苦しい。

でも、……信じていた、本当に親友だと信じていた人物にこいつして裏切られることが一番苦しくてたまらなかつた。

信じられなかつた

田の前で罵声を浴びせている路は……偽者ではないのか。

……これは、夢ではないのか。

やつ思ひと、思わず涙が溢れ出してくる。

「……はあつ、は……つ、……蓮。これから、お前をこのがけから突き落

とか

じぱりへ馬鹿を浴びせていた啓が呼吸を整えて……俺にこういった。

「……」

さすがに俺も驚いた。

かといつて逃げられない。

足を怪我しているし、啓が俺を押さえつけたままだったからだ。

「……がけの下は、とがった岩だらけなんだ。まあ、ここから落ちた人がいたけど、その人は助からなかつたって聞いたことがある。」

……そんな。

「……さよなら、飛鳥蓮。」

二つの間にか、がけのすぐそば。

俺は、啓に押されて、……まつさかまこ

第十八話 … ひつじ。 (後書き)

お久しぶりです。r_n

ボツになつた話が生き返りました。

ただ単にめんどくさかつたからなんですね。d (r_y

このあたりでやつと半分くらいかな…

疲れました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5354c/>

嘆きの声

2010年10月15日19時26分発行